

第四講 パウロの自己紹介 (三) 第一章 三、四節の研究 (二月六日)

第一節の終に「福音」の一語出でしため、二節は之を受けて「此福音は從前より豫言者たちに託りて聖書に誓ひ給へるものにて」と述べ、三節前半は「其子我等の主イエスキリストを指して示せり」と云ふ、これ福音の中心問題が「神の獨子」なることを示したのである、そして三節後半と四節とは此の獨子について記して云ふ「彼は肉體に由ればダビデの裔より生れ、聖善の靈性に由れば甦りし事によりて明かに神の子たること顯はれたり」と、これ使徒パウロの基督觀の簡約にして、此自己紹介の中樞、弓形橋の要石たるものである。

この三、四節は原文に於て僅かに二十八字、英譯に於て四十一字（共に冠詞をも加算して）より成りて、一節より七節に亘る一成文の一部たるに過ぎないが、其内容の莊大、深遠、高貴なるは誰人も認めざるを得ざる處である、一節―七節を表門と見たる吾人の比喩を用ふれば、既に表門の闕を見、鴨居を仰ぎたる縦覽者は測らずも天井を仰ぎて其處に一大彫刻物を認めたるが如きものである、「大」と云ふは其大いさを指さずして實質を指す、まことに類稀なる大傑作である、しかし乍ら凡て大傑作の特徴として之を領得することは容易でない、大體を掴むことは甚しく困難ではないが其全部を精密に且正確に知得することは至難である、されば此彫刻物の不可解なるに困惑し果てゝ遂に本館に入らずして此處より引返す者も少なくないのである、由來パウロの文章には斯かる難所少からずして、此兩節については大註解者が各その説を異にする有様である、ために我等も適歸する所に迷ふのである、しかし乍らパウロは固より人を苦しめんために不可解の文辭を弄した人ではない、必ずや或重大な

る眞理を提示するを目的として、彼自身に於ては極て明瞭なることを——あまりに明瞭なるがため——簡潔に記したのであらう、故に我等は此兩節を成るべく能く理解せん事を努むべきである。

日本譯聖書の譯は正確でない、今原文を左の如くに譯して見よう。

「この福音は從前より其預言者たちによりて聖書に誓ひ給へるものにて」神の子に關するものなり、彼は肉によればダビデの裔より生れ聖なる靈によれば死よりの復活を以て明かに神の子たること顯れたる者、即ち我等の主イエスキリストなり。

これは決して完全なる改譯ではない、たゞ成るべく邦譯聖書の譯文を破壊しない程度で試みた假りの譯である、茲にイエスが唯の偉人又は聖人として記されて居ないことは一讀して明かである、難ずる者は言ふであらう、イエスはイエスで可い、單なる人、偉人、聖人、ナザレの預言者で可い、かゝる難かしき基督論は不用である、まして書翰劈頭の自己紹介中に斯かる面倒なる神學的命題を記すが如きはパウロ其人の意を知るに苦しむと。

かゝる立場より見る時は、この三、四節には少からぬ難問題が含まるゝのである、大工の子イエスがダビデ王統の人なりしとは、當時の猶太人にも異邦人にも明かに一の大疑問である、勿論彼等の容易に承認しがたき事であつたに相違ない、然るに此イエスは神の子であると云ふ、神の子とは神の子たちの意ではない、神の獨子 (The Son of God) の意である、然らば普通の人と全く本質を異にせる或る存在者を指すに相違ない、故に之は尚ほ難かしき問題である、然るに彼が神の子たる事の明かとなつたのは復活に依るとは益々大なる難問題である、復活其事が既に信じ難き事である、然るに之を以てイエス神性の證據とすると云ふ、もし何か他の解し易き事——例

へば彼の人格とか教訓とか業爲とかの類——に於てイエスの神性が現はれたとならば之を理解するの道もあらう、然るに極めて疑はしき彼の復活を提^ちげて神性を證據立てんとは恰も空虚の上に壯屋を築かんとする類ではないか、併し假りに數歩を譲つてイエスの甦りを事實と認むるも、何故に甦りし事が彼の神性を現はしたかゞ明かに一の難問題となるのである、甦りと云ふ事が若し在るならば必しも彼一人に限つたことはなからう、然るに彼のみ其事のために神の子たることが顯はれたというは證據頗る薄弱であると、かく見來れば此兩節中に幾つもの難問題が潜んで居るのである。

尚ほ一つの問題がある、「ダビデの裔」とある裔は原語 *γενεα* (スペルマ) で男系の裔を意味す、然等ばヨセフをダビデの後裔と見て其子たるイエスを「ダビデの裔より生れ」と云ふたのであらう、果して然らば福音書の強調するイエスの處女出生はパウロの否認するところであるのかと、これ亦聖書解釋上の一難問である、現にマイヤーの羅馬書註解(英譯四十五、六頁)は之を以てヨセフの家系を示すとなし、パウロは處女出生を其文書の何處に於ても支持せずとの頗る明快なる論定を下してゐるのに對して、ゴデーは其羅馬書註解(英譯百廿八頁)に於て可成り有力なる根據の上に之をマリアの家系と見て、マイヤーと正反對の意見を提出して居る、孰れの見方にも相當の根據ありて、信仰問題としてはいざ知らず聖書學上の問題としては人をして取捨に迷はしむるものである。

然り難問題は羅馬書第一章三、四節には幾つも潜んでゐる、併し聖書は由來信仰の立場に於て讀むを本義とする、辭義の攻究固より肝要であるが、信仰の眼を以てせずしては聖書は謎の世界である、聖書は信仰の書である、

そして信仰の書は信仰の鏡に照らされて初めて其眞の姿を現はすのである、靈の事は靈の眼にしか映らない、我等は信仰なき者の奇怪とする所、聖書學者の至難とする所をも靈の眼を以て見透さんとの勇猛心を揮ふを要するのである。

「肉によれば」とは何を意味するか、ゴオデーの研究によれば聖書の「肉」(希臘語 *οὐρά*, 英語 *flesh* に當る)には三義ある、第一は骨や血に對する肉の意で肉それ自身を指す、第二は體全部即ち肉體を意味する、第三は人間を意味する、此第三義の例を挙げれば「諸人 (all flesh) こぞりて汝に來らん」(詩篇六十五篇の二)「神の前に義とせらるゝ者一人だに有ることなし(直譯——凡ての肉[△]神の前に義とせれず)」(ロマ書三の廿)等がある、邦譯聖書が「肉體」と譯したのは此第二義を採つたのであるが、パウロは單にイエスの肉體のみを意味したのであるうか、イエスに神性と人性の兼有を信じ居たる彼は、寧ろ此場合肉なる文字を第三義に用ひたのであると思ふ。

即ちイエスは「人としては」ダビデの裔より生れたのである、これ彼の人的半面である、そして「聖き靈」によれば神の獨子なのである、彼には神と人との二つの性質があつた、彼は一面人であつて一面神であつた、彼に於ては人性と神性との兩者が融合して一となつて居た、これパウロの主張であつた、そして羅馬書一章三、四節の主意は茲にある、之を形而上學的に又は神學的に講究する事は暫く別として、單純なる基督者の信仰の立場より眺むるとき之は是非とも不可缺の事である、イエスの神性が否定せらるゝ時は信仰の據て立つべき土臺が失せる、我等は空を踏まへて信仰の脚を立つる事は出来ない、彼を單なる人と見るは理論上に於ては或は困難に陥らぬ道であるかも知れぬ、之を合理的と稱して誇る人が多い、果して事實上合理的なるかは一疑問であるが少くと

も合理的に見える事は慥かである、しかし斯くては信仰其ものが殆ど有るか無きかの如く稀薄となり去るを如何、感謝なく歡喜なく平安なく詩なく歌なきは此種の立場である、事實は雄辨以上の雄辨である、見よユニテリアン教の如何に乾燥無味なるよ！ 見よユニテリアン教徒の如何に信仰的潤味を缺けるよ！ 彼等に種々の長處がないではない、さり乍ら最も重要な靈的生命の中核を缺けることは、彼等に感謝の詩なく歡喜の歌なきに依て明かである、人の最も切に求むるものは理論の純一に非ずして魂の純一である、而して魂の純一は涙の伴ふ信仰に依らずしては得られない、我等は勿論理論を蔑視するものではない、たゞ理論に囚はれて心靈の光を鈍らする徒を蔑視するものである、人よ我等を以てかの狂信者流となす勿れ、

然りイエスの神性を認むるは信仰をして信仰たらしむる道である、其故如何、けだし救拯なき處信仰は生起しない、而して人は單なる同類の一人に依て救拯に與り得べき者ではない、何となれば人は如何に偉大なりとも其揮ふ能力に制限があるからである、數年前までは米の大統領ウィルソンは世界の救済者の如く思はれて居た、しかし今や果して如何、彼は今日に於て寧ろ世界の壞亂者たらざるかを思はしむる程である、世界に於て今や唯一人として彼に依て救はれようとする者はない、さはれ是れ必しもウィルソンの罪にあらず、由來人間には人間を救ふ力が與へられて居ない、救拯は唯萬物の主なる神と其代理者たる獨子キリストとのみより来る その他の誰人よりも眞の意味の救拯は來らない、ダビデよりもソロモンよりも、イザヤよりもエレミヤよりも、パウロよりもルーテルよりも救は來らない、イエス若し單なるダビデの後裔であるならば如何に絶倫無比の人格者にても到底人を救ひ得ない、唯彼に神の性があればこそ人を救ひ得たのである、又救ひ得るのである、人の持たぬ性が彼

にあればこそ人の持たぬ力が彼に有りて人類の救者たり得るのである、之は彼の救に浴した者に於ては極めて明々白々なる實驗上の眞理である、此事が根柢になくば基督教は有るも効なき宗教である、淺く民の女の傷を醫やして平康からざるに平康し平康しと云ふ教である、基督教がイエスの神性の上に立つて居らぬ宗教ならば我等は一刻も早く此宗教を去るべきである、何となればこの宗教を信奉せしために種々の苦痛や不便に逢ふは愚の極であるからである、もし基督教が人を救ひ得る宗教であるならば、是非ともイエスの神性を其根柢として持つものでなくてはならぬ、故に言ふ、イエスは明かに神の獨子である、其神性は日の如く月の如く明かであると。

かくイエスの本質として神性を認むる時は、彼は天の榮位を去り身を下して人となつたと見る外ないのである、即ちパウロが晩年に於て、「彼は神の體にて居りしかども自から其の神と等しく在る所の事を棄て難きことと思はず、却て己れを虚うし僕の貌をとりて人の如くなれり」(ピリピ二の六、七)と言ひし如くである、即ち神の獨子なる彼が人として人間世界に現はれたのである、然らば何故この事に出づる必要ありしかとの疑問が起る、之に答へるものとして我等は希伯來書四章十四—十六節を提示する。

されば我等に空を通りて昇りし大なる祭司の長即ち神の子イエスあり、故に我等信する所の教を固く保つべし、そは我等が在弱を體恤すること能はざる祭司の長は我等に有らず、彼は凡ての事に我等の如く誘はれたれど罪を犯さざりき、是故に我等恤みを受け機に合ふ助となる恩恵を受けんために憚らずして恩寵の座に來るべし。

神の子がイエスとなり大なる祭司の長となりて人の間に幾年かを人と共に送り、其間患難の風に吹かれ辛苦の雨

に打たれ、罪は犯さざりしも屢々人と同じく誘はれ、人の荏弱を體恤り得る立場に己れを置き、遂には萬民の罪を贖ふために十字架に上り、甦り、空を通りて昇り、今や神の右に坐して祭司の長として人の罪のため刻々執成の勞を取りつゝある、かるが故に我等は信ずる所を固く保つべきである、かるが故に我等は「恩恵を受けんために憚らずして恩寵の座に來るべ」きである、一言にして云へば神の子が降世して人となりし故に人の救拯は成立したのである、これなくば人は遂に絶望の捕虜となる運命を脱することは出来ない、イエスに人性と神性の兩面が共在したればこそ彼は人類の救主たるのである、羅馬書一章の三、四節について疑問とすべき點は幾つもあるが、その主意はイエスの人性神性の具有を示すにあるは明かである、そして此事は彼が救主たるべく必須の事であつて、從つて我等の救拯のために必須の事である、頭腦の上にのみ福音を悟了せんとする人には之は躓きの石である、しかし其の全心魂を擧げて救拯の實得と生命の分與に與からんと志せる惱める魂に取りては實にまことに天來の福音である。

イエスはダビデの裔より出づ、故に人である、史的人物である、即ち過去の人である、イエスは神の子である、故に主である、今在る者である、昔在り今在り後在り、昨日も今日も永遠までも變らざる者である……

イエスはダビデの子である、故にユダヤ人の王として生れしものである、約束のメシヤ、イスラエルの救出者である、イエスは神の子である、故に人類の首として降りしものである、王の王、主の主、人類を永遠に救ひ之をして永遠の生命に浴さしむる者である……

然らば「死よりの復活を以て明かに神の子たる事顯はれた」との四節の斷定の意味は如何、之を二方面より眺

むるを得と思ふ、第一彼は初めから神の子であつた、「太初に道あり、道は神と共にあり、道は即ち神なり」と云ふ、然り彼は太初から——生誕より前に、勿論復活より前に——神の子であつた、慥かに然であつた、しかし然うあつたのみで然う表はれなかつた、然るに彼は人となりて死するや忽ち復活した、茲に於て彼の神の子であつた事が初て明かに人々に表はたのである、見よ彼の使徒すら眞に彼を神の子と認めたのは彼の復活てふ一大事實に接せし後であつた、その以前に於て「汝はキリスト、活ける神の子なり」との彼等の信仰をペテロが述べたのは未だ點晴せざる畫龍であつた、されば彼等は復活を彼の神性の證據として掲げた「既に神はイエスを甦らせ給へり、我等は皆その證人なり……されば凡てイスラエルの全家よ、汝等が十字架に釘けし此イエスを立て、神これを主となしキリストとなし給ひし事を確かに知れ」(行傳二章三二—三六節)と、實に復活によりて彼の神の子たる事が顯彰せられたのである、もとより然りしと雖も其然る事が之に依て事實的に表はたのである。

第二に我等は之を他の方面より見る事が出来る、「明かに」と譯されし原語は *φανερὰν* (ヘンドウナイ) であつて之を英語にて *with power* (力を以て) と譯してある、「明かに」は勿論意譯であるが決して充分な譯字ではない、次ぎに「顯はれたる」は原語 *οφανερός* (ホリスセントス) にして、之に種々の意義あるため孰れを採るべきか、學者間の問題となるのであるが、立てられたとの意に取る事も出来るのである、然る時は「死よりの復活により權能を以て神の子として立てられたる者」と改譯する事も文字上優に容さるゝのである、かく見る時は復活後のキリストは或特殊の位に即いたのであつて、降世以前の彼とは別の或状態に入つたと見る事が出来るのである、

これ神學的には大問題であるが聖書の教ふる處は慥にあると思ふ、即ち神の子たる彼が一度人となり復活昇天して再び舊もとの神の子となつたのではない、降世以前の彼と昇天以後の彼の間に著るしき相違がある、實に神の獨子の降世は永久に彼が人となることであつた、彼は神たることを棄てゝ人となり了つたのである、三位の神は其一位を永とこへに棄て去つたのである、「その神と等しくある所の事を棄て難き事と思はず却て己を虚うし……人の如くなり」とは正に此事を云ふたのである、故に三十餘年の彼の地上生活に於ては彼の本質は神であつて現實は人であつたのである、そして「既に人の如き形狀ありさまにて現はれ、己を卑ひくくし、死に至るまで順したがひ、十字架の死をさへ受くるに至」つた、「是故に神は甚しく彼を崇めて諸々の名に超る名を之に與へ給」ふたのである、これ即ち榮化である、彼は舊もとの所に歸つて悉く人性を脱して再び舊の「道みち」となつたのではない、人として榮化して神の右に坐するに至つたのである、即ち彼は今も尚ほその人たる性を脱せずして榮化せられし人として——しかし其最高位に——在るのである、

此意味に於ては我等もまた彼に肖にたる者となり得るのである、即ち救はれたる者に終に與えらるゝ榮化は現存のキリストに肖たる者となるのである、彼は長兄たり嫡子たり他の者は皆彼の弟妹たることを得るのである、「それ神は豫め知り給ふ所の者を其子の形に倣あらかじはせんと豫め之を定む、こは其子を多くの兄弟の中に嫡子あたらせんが爲なり」(羅馬書八の二九)とあるが如きは此事を云ふたのである、其他新約聖書の各箇處を總合して此見方の正しきとを我等は知るのである、彼すでに復生よみがへりの初穂となり、第一に榮化して長兄として神の右に坐して我等のために執成せる故、「神すでに主を甦よみがへらせ給ふ、又その能力ちからをもて我等をも甦よみがへらすべ」き事を信じ、榮化して彼に

肖たる者となるべき事を信じ、茲に安心と希望を繋ぐのである、「死よりの復活により權能をもて神の子として立てられたる者」と云ふ、意味は極めて深遠である、しかし汲みて盡きせぬ生命の源が茲にあることを誰か否定し得よう。

「聖善の靈性によれば」と云ふは古來幾多の註解者を悩ましたる一句である、これを原文のまゝに譯すれば「聖なる靈によれば」である、「聖なる靈」とは何を意味するか、原語 *πνευμαγιονον* (プネウマ ハギオースネース) は英語の *spirit of holiness* に當り、聖、淨、の靈の意である、聖、淨の靈とは何を指すか、頗る朦朧たる語句である、ために幾つもの解釋が生れたのであるが、大體に於て之を左の三類に分つことが出来る。

第一、聖靈と見る、此見方を取つた人はクリソストム、フリツチエ、ベツア、トルック、ゴードー等である。

第二、神性と見る、此見方の人はメランクトン、ベンゲル、ガアヴィ、オルスハウゼン等である。

第三、靈性と見る、即ち人としてのイエスの靈性(神性にあらず)しかし特別に聖なる故聖なる靈と云ふたのであると、之を主張する人はマイヤー等である。

以上三つの中孰れを採るも文字上の故障はない、即ち「聖なる靈」といふ語は以上の孰れをも意味し得る語である、従つて孰れを採るべきかと云ふ事が單に意味の上の問題となる、是れ此句の解釋の難しき理由である、大聖書學者を悩ましたる此種の問題については我等は輕々に最後の決定を與ふことを避くべきである、以上の三意は孰れも多分原意に近いものであらう(よし正解でないとしても)、あるいはパウロは此三義を兼ねた積りで斯る廣い語を用ひたのかも知れぬ、孰れにしても死と共に死せざる或靈的のものを指したことは明かである、此或者

によれば、ダビデの子イエスは復活を以て神の子として現はれたとパウロは云ふのである、即ち第四節の主意は其ふくむ難句の如何に係らず頗る明晰であると思ふ。

第四節の最後には「即ち我等の主イエスキリストなり」とある、之を原語の順序のまゝに譯せば

イエス キリスト 我等の主

である、「イエス」はたゞ人としての名即ち彼の人たることを示す、「キリスト」はメシヤ即ち受膏者を意味す、ダビデの子イスラエルの主としてイスラエル積年の希望たりし贖い主である、さればキリストなる名稱は嚴密に云へばユダヤ人にのみ係りある語にて異邦人たる我等には係りなきものである、「我等の主」とは萬民の主を意味する、萬民の罪を擔いて十字架に死し甦りて神の子の榮位に即き、神の右に坐して永へに生き、今我等のために執成し今我等に恩恵と平康を與へ生命と力とを賜はり、時滿つれば再び臨るべき人類の救主を云ふ、以上の三性質を兼ねるものが「我等の主イエスキリスト」である、人であると共にユダヤ人の王であり、ユダヤ人の王であると共に人類の主であるのが即ち主イエスキリストである、「イエス」と「キリスト」とは時間と空間との制限を受くる史的人物として彼を示し、「主」は時間空間を超越せる永遠無碍の存在者として彼を示す、「主」が最も廣く且重き語であることは云ふまでもない、此語を以て彼と人類との關係が云ひ表はされるのである、されば福音を稱してキリスト教と云ふは實は不充分である、キリスト教は即ちメシヤ教と云ふと等しく單に猶太人に係る語である、「主」を希臘語に於てキリオスと云ふ、故に之をキリオス教と改稱する時初めてその全人類に係る救の音信なることが示さるのである、それはともかく「主イエスキリスト」なる一語は不用意に發せらるべき

語ではない、彼の本性を三方面より言ひ表はせし語として其内容の廣く高く且深きに注意せねばならぬ、然るに今や此語を無意味に口にする者甚だ多きは歎すべきことである。

一節の終わりに「福音」という一語が出たため、二節はこれを受けて「この福音は以前から、神がご自分の預言者たちを通して、聖書にあらかじめ約束されているもので」と述べ、三節の前半は「御子に関するものです」と言う。これは福音の中心問題が「神の独り子」であることを示したのである。そして三節の後半と四節は、この独り子について記して言う。「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです」と。これは使徒パウロのキリスト観の要約であり、この自己紹介の中枢、弓形橋の要石なのである。

この三節と四節は、原文ではわずか二十八字、英訳では四十一語（いずれも冠詞も加えて）から成り、一節から七節にわたる一つの文章の一部にすぎないが、その内容の荘大さ、深遠さ、高貴さは誰でも認めざるを得ないところである。一節から七節を表門と見た私たちのたとえを用いれば、すでに表門の敷居を見て、鴨居を仰いだ見学者が、期せずして天井を見上げ、そこに一つの大きな彫刻物を認めたようなものである。「大」というのは、その大きさを指すのではなく、実質を指している。まことに類稀な大傑作である。しかしながら、すべての大傑作の特徴として、これを理解することは容易ではない。大棒をつかむことはそれほど困難ではないが、その全体を精密かつ正確に知得することは至難である。そのため、この彫刻物の不可解さに困惑し果て、ついに本館に入らずにここから引き返す者も少なくないのである。

もともとパウロの文章には、このような難解な箇所が少なくなく、この二節については、大きな注釈家たちがそれぞれその説を異にする状況である。そのため、私たちもどこに落ち着くべきか迷うのである。しかしながら、パウロはもとより人を苦しめるために不可解な文言を弄した人ではない。必ずや、ある重大な真理を提示することを目的として、彼自身にとっては極めて明瞭なことを――あまりにも明瞭であるために――簡潔に記したのであらう。ゆえに、私たちはこの二節をなるべくよく理解するように努めるべきである。

日本訳聖書の訳は正確ではない。今、原文を次のように訳してみたい。

「（この福音は以前からその預言者たちによつて聖書に約束されているもので）神の子に関するものである。彼は肉によればダビデの末裔から生まれ、聖なる霊によれば死からの復活をもつて明らかに神の子であることが顕れた方、すなわち私たちの主イエス・キリストである。」

これは決して完全な改訳ではない。ただ、なるべく邦訳聖書の訳文を破壊しない程度で試みた仮の訳である。ここにイエスがただの偉人または聖人として記されていないことは、一読して明らかである。異論を唱える者は言うだろう。イエスはイエスでよい、単なる人、偉人、聖人、ナザレの預言者でよい、このような難しいキリスト論は不用である。まして書簡の冒頭の自己紹介の中に、このような面倒な神学的命題を記すなど、パウロ本人の意図を知るのに苦しむと。

このような立場から見るとき、この三節、四節には少なくない難問題が含まれる。大工の子イエスがダビデ王統の人であったことは、当時のユダヤ人にも異邦人にも明らかに大きな疑問である。もちろん、彼らが容易に承

認しがたい事柄であつたに違いない。それなのに、このイエスは神の子であると言う。神の子とは、神の子たち（複数）の意味ではない、神の独り子（The Son of God）の意味である。そうであれば、普通の人と全く本質を異にするある存在者を指すに違いない。ゆえに、これはさらに難しい問題である。さらに、彼が神の子であることが明らかにしたのは復活によるとは、ますます大きな難問題である。復活そのものがすでに信じがたい事柄である。それなのに、これをイエスの神性の証拠と断言する。もし何か他の解しやすい事柄——たとえば彼の人格とか教訓とか行いとかの類——においてイエスの神性が現れたとするならば、これを理解する道もあるだろう。然るに、極めて疑わしい彼の復活を持ち出して神性を証拠立てようとは、あたかも空虚の上に壮麗な建物を築こうとするようなものではないか。しかし仮に数歩を譲って、イエスの復活を事実と認めるにしても、なぜ復活したことが彼の神性を現したのか、明らかに一つの難問題となる。復活という事柄がもしあるならば、必ずしも彼一人に限ったことではないだろう。それなのに、彼だけがその事柄によつて神の子であることが顕れたというのは、論拠がはなはだ薄弱であると。このように見えてくると、この二節中にはいくつもの難問題が潜んでいるのである。

さらにもう一つの問題がある。「ダビデの裔」とある裔は、原語 *ben dauid*（スベルマ）で男系の裔を意味する。そうであれば、ヨセフをダビデの後裔と見て、その子であるイエスを「ダビデの裔から生まれた」と言ったのであろう。果たしてそうだとすれば、福音書が強調するイエスの処女出生は、パウロの否定するところであるのかと、これもまた聖書解釈上の一難問である。現にマイヤーのローマ書注解（英訳四十五、六頁）は、これ

をヨセフの家系を示すものとし、パウロは処女出生をその文書のどこにおいても支持しないとの、きわめて明快な論定を下しているのに対して、ゴードーはそのローマ書注解（英訳百二十八頁）において、かなり有力な根拠の上にこれをマリアの家系と見て、マイヤーと正反対の意見を提出している。どちらの見方にも相応の根拠があり、信仰問題としてはいざ知らず、聖書学上の問題としては、人々に取捨に迷わせるものである。

然り、難問題はローマ書第一章三節、四節にはいくつも潜んでいる。しかし、聖書はもとより信仰の立場において読むことを本義とする。言葉の意味の攻究はもちろん肝要であるが、信仰の目をもってせずしては、聖書は謎の世界である。聖書は信仰の書であり、そして信仰の書は信仰の鏡に照らされて初めてその真の姿を現すのである。霊的な事柄は霊の目にしか映らない。私たちは信仰なき者が奇怪とするところ、聖書学者の至難とするところをも、霊の目をもって見通そうという勇猛心を奮う必要がある。

「肉によれば」とは何を意味するか。ゴードーの研究によれば、聖書の「肉」（ギリシア語 *σαρξ*、英語 *flesh* にあたる）には三つの意味がある。第一は骨や血に対する肉の意味で、肉それ自身を指す。第二は体全部、すなわち肉体を意味する。第三は人間を意味する。この第三義の例を挙げれば、「諸人（all flesh）こぞりて汝に來らん」（詩篇六十五篇二節）、「神の前に義とされる者一人だに有ることなし（直訳―すべての肉 △ 神の前に義とされず）」（ローマ人への手紙三章二十節）などがある。邦訳聖書が「肉体」と訳したのはこの第二義を採ったのであるが、パウロは単にイエスの肉体のみを意味したのであろうか。イエスに神性と人性の兼有を信じていた彼は、むしろこの場合「肉」という文字を第三義に用いたのだと思う。

すなわち、イエスは「人としては」ダビデの末裔から生まれたのである。これ彼の人的半面である。そして「聖き霊」によれば神の独り子なのである。彼には神と人との二つの性質があつた。彼は一面人であつて一面神であつた。彼においては人性と神性との両者が融合して一つとなつていた。これがパウロの主張であり、そしてローマ書一章三節、四節の主旨はここにある。これを形而上学的に、または神学的に講究することはしばらく別として、単純なキリスト者の信仰の立場から眺めるとき、これは是非とも不可欠のことである。イエスの神性が否定されるときは、信仰のよりどころとすべき土台が失せる。私たちは空を踏まえて信仰の足を立てることはできない。彼を単なる人と見るのは、理論上においては、あるいは困難に陥らない道であるかもしれない。これを合理的と称して誇る人が多い。果たして事実上合理的であるかは疑問であるが、少なくとも合理的に見えることは確かである。しかし、こうしては信仰そのものがほとんど有るか無きかのごとく稀薄となり去ることをどうするか。感謝なく、歓喜なく、平安なく、詩なく、歌なきは、この種の立場である。事實は雄弁以上の雄弁である。見よ、ユニテリアン教のいかに乾燥無味なことか！見よ、ユニテリアン教徒のいかに信仰的潤味を欠いていることか！彼らに種々の長所がないわけではない。しかしながら、最も重要な霊的生命の中核を欠いていることは、彼らに感謝の詩なく歓喜の歌なきによつて明らかである。人が最も切に求めるものは、理論の純一ではなく、魂の純一である。そして魂の純一は、涙を伴う信仰によらずしては得られない。私たちはもちろん理論を蔑視するものではない。ただ、理論に囚われて心靈の光を鈍らせる輩を蔑視するものである。人よ、私たちをあの狂信者流と見なすなかれ。

然り、イエスの神性を認めるのは、信仰を信仰たらしめる道である。その理由はなぜか。それは救済なきところに信仰は生起しないからである。そして人は、単なる同類の一人によつて救済にあずかることができる者ではない。なぜなら、人はいかに偉大なりとも、その振るう能力に制限があるからである。数年前までは米の大統領ウィルソンは世界の救済者のように思われていた。しかし、今や果たしてどうか。彼は今日において、むしろ世界の壊乱者ではないかと思わせるほどである。世界において今や、唯一人として彼によつて救われようとする者はいない。それは必ずしもウィルソンの罪ではない。もともと人間には人間を救う力が与えられていない。救いは、ただ万物の主なる神と、その代理者たる独り子キリストとのみから来る。その他の誰人からも真の意味の救いは来ない。ダビデよりもソロモンよりも、イザヤよりもエレミヤよりも、パウロよりもルターよりも救いは来ない。イエスがもし単なるダビデの後裔であるならば、いかに絶倫無比の人格者であっても、到底人を救い得ない。ただ彼に神の性があつてこそ、人を救い得たのである。また、救い得るのである。人の持たない性質が彼にあればこそ、人の持たない力が彼にあつて、人類の救世主たり得るのである。これは彼の救いに沿した者にとつては、極めて明白な経験上の真理である。このことが根底になれば、キリスト教は有つても甲斐なき宗教である。浅く民の娘の傷を癒やして、安からざるに安し安しと言う教である。キリスト教がイエスの神性の上に立つていない宗教ならば、私たちは一刻も早くこの宗教を去るべきである。なぜなら、この宗教を信奉したがために種々の苦痛や不便に遭うのは愚の極みだからである。もしキリスト教が人を救い得る宗教であるならば、是非ともイエスの神性をその根幹として持つものでなくてはならない。ゆえに言う、イエスは明らかに神の独り子で

あり、その神性は日や月のように明らかであると。

こうしてイエスの本質として神性を認めるとき、彼は天の栄位を去り、身を低くして人となったと見るほかないのである。すなわち、パウロが晩年に「キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ」た（ピリピ人への手紙二章六、七節）と言ったとおりである。すなわち、神の独り子である彼が、人として人間世界に現れたのである。それならば、なぜこのようにする必要があったのかという疑問が起こる。これに答えるものとして、私たちはヘブル人への手紙四章十四節から十六節を提示する。

私たちには、もろもろの天を通られた、神の子イエスという偉大な大祭司がおられるのですから、信仰の告白を堅く保とうではありませんか。私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯しませんでしたが、すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。

ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。

神の子がイエスとなり、偉大な大祭司となって人々の間に幾年かを人と共に送り、その間、患難の風に吹かれ、辛苦の雨に打たれ、罪は犯さなかったが、たびたび人と同じく誘惑され、人の弱さを思いやり得る立場に自らを置き、ついに万民の罪を贖うために十字架に上り、復活し、天を通して昇り、今や神の右に座して大祭司として、人々の罪のために刻々執り成しの労を取りつつある。このような理由から、私たちは信じるところを堅く保つべ

きである。このような理由から、私たちは「恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づ」くべきである。一言で言えば、神の子が世に下って人となったからこそ、人の救済は成立したのである。これがなければ、人はついに絶望の捕虜となる運命を脱することはできない。イエスに人性と神性の両面が共存したからこそ、彼は人類の救い主なのである。ローマ書一章の三、四節について疑問とすべき点はいくつもあるが、その主旨はイエスの人性神性の具有を示すことにあるのは明らかである。そしてこの事柄は、彼が救い主たるべく必須の事柄であって、したがって私たちの救済のために必須の事柄である。頭脳の上にのみ福音を悟ろうとする人には、これは躓きの石である。しかし、その全心を挙げて救済の獲得と生命の分与にあずかろうと志した悩める魂にとっては、実にまことに天来の福音である。

イエスはダビデの末裔から出る。ゆえに人である、史的人物である。すなわち過去の人である。イエスは神の子である。ゆえに主である、今在る者である。昔在り今在り後在り、昨日も今日も永遠までも変わらざる者である……

イエスはダビデの子である。ゆえにユダヤ人の王として生まれた者である。約束のメシヤ、イスラエルの救済者である。イエスは神の子である。ゆえに人類のかしらとして降臨した者である。王の王、主の主、人類を永遠に救い、これを永遠の生命にあずからせる者である……

それならば、「死からの復活をもって明らかに神の子であることが現れた」との四節の断定の意味はどうか。これを二つの側面から眺めることができると思う。第一、彼は初めから神の子であった。「初めにことばがあった。

ことばは神とともにあつた。ことばは神であつた」と言う。然り、彼は初めから——生誕よりも前に、もちろん復活よりも前に——神の子であつた。確かにそうであつた。しかしそうあつたのみで、そう表れなかつた。ところが、彼は人となりて死するや、たちまち復活した。ここにおいて、彼の神の子であつたことが初めて明らかに人々に表れたのである。見よ、彼の使徒ですら、真に彼を神の子と認めたのは、彼の復活という一つの大事実に接した後であつた。その以前において、「あなたは生ける神の子キリストです」との彼らの信仰をペテロが述べたのは、まだ点晴せざる画龍であつた。だから、彼らは復活を彼の神性の証拠として掲げた。「このイエスを神はよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です……ですから、イスラエルの全家は、このことをはつきり知らなければなりません。神が今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです」(使徒の働き二章)と。実に復活によつて、彼の神の子であることが顕彰されたのである。もとよりそうであつたといえ、そうであることがこれによつて事実として表れたのである。

第二に、私たちはこれを他の方面から見るができる。「明らかに」と訳された原語は *εὐδοκῶνται* (エンドウナマイ) であつて、これを英語で *with power* (力をもつて) と訳してある。「明らかに」はもちろん意識であるが、決して充分な訳語ではない。次に「現れたる」は原語 *οὐρανὸς* (ホルスセントス) であつて、これに種々の意味があるため、どれを採るべきかが学者間の問題となるのであるが、「立てられた」との意に取ることもできるのである。そうすると、「死からの復活により権能をもつて神の子として立てられたる者」と改訳することも、文字上ではまさに許されるのである。このように見るときは、復活後のキリストは、ある特

別の位に即いたのであって、降世以前の彼とは別の、ある状態に入ったと見ることができるのである。

これは神学的には大問題であるが、聖書の教えるところは確かにここにあると思う。すなわち、神の子である彼が、一度人となり、復活昇天して再び元の神の子になったのではない。降世以前の彼と昇天以後の彼の間に著しい相違がある。実に神の独り子の降世は、永久に彼が人となることであつた。彼は神たることを捨てて人となり終えたのである。三位一体の神は、その一位を永遠に捨て去つたのである。「神としてのあり方を捨てられな」とは考えず、ご自分を空しくして……人としての姿をもつて現れ」た（ピリピ人への手紙二章六節、七節）とは、まさにこのことを言つたのである。ゆえに、三十余年の彼の地上生活においては、彼の本質は神であつて、現実には人であつたのである。そして「人としての姿をもつて現れ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました」。「それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられた」（ピリピ人への手紙二章七節、八節）のである。これこそ栄化である。彼は元の所に歸つて、悉く人性を脱して再び元の「ことば」となつたのではない。人として栄化して、神の右に座するに至つたのである。すなわち、彼は今もなお、その人たる性質を脱せずに、栄化せられた人として——しかしその最高位に——在るのである。

この意味において、私たちもまた彼に似た者となり得るのである。すなわち、救われた者に終に与えられる栄化は、現存のキリストに似た者となることである。彼は長兄たり嫡子たり、他の者は皆彼の弟妹となることができるのである。「神は、あらかじめ知っている人たちを、御子のかたちと同じ姿にあらかじめこれを定められたのです。それは、多くの兄弟たちの中で御子が長子となるためです」（ローマ人への手紙八章二十九節）とあるのは、

このことを言ったのである。その他、新約聖書の各箇所を総合して、この見方の正しいことを私たちは知るのである。彼すでによみがえりの初穂となり、第一に栄化して長兄として神の右に座し、私たちのためにとりなしているゆえ、「神は主をよみがえらせましたが、その御力をよって私たちも、よみがえらせてくださる」(コリント人への手紙第一 十六章十四節)ことを信じ、栄化して彼に似た者となるべきことを信じ、ここに安心と希望を繋ぐのである。「死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方」(ローマ人への手紙一章四節)という意味は、極めて深遠である。しかし、汲めど尽きせぬ生命の源がここにあることを、誰が否定できようか。

「聖なる霊によれば」というのは、古来多くの注釈者を悩ませた一句である。これを原文のままに訳せば「聖なる霊によれば」である。「聖なる霊」とは何を意味するか。原語 *hēnēn dānī oobannā* (ブネウマハギオースネース) は英語の *spirit of holiness* にあたり、聖浄の霊の意味である。聖浄の霊とは何を指すか、はなはだあいまいな語句である。そのためいくつもの解釈が生まれたのであるが、大体において、これを次の三つの類に分けることができる。

第一、聖霊と見る。この見方を採った人はクリソストム、フリッツェ、ベツア、トルック、ゴードーなどである。

第二、神性と見る。この見方の人にはメランクトン、ベンゲル、ガアヴィ、オルスハウゼンなどである。

第三、霊性と見る。すなわち、人としてのイエスの霊性(神性ではない)。しかし特別に聖なるゆえ、聖なる

霊と言ったのである。これを主張する人はマイヤーなどである。

以上の三つのうち、どれを採るにも文字上は問題ない。すなわち「聖なる霊」という語は、以上のどれをも意味し得る語である。したがって、どれを採るべきかということが単に意味の上の問題となる。これがこの句の解釈の難しい理由である。大聖書学者を悩ませたこの種の問題については、私たちは軽々に最後の決定を与えることを避けるべきである。以上の三つの意味は、いずれも多分原意に近いものであろう（たとえ正解でないとしても）。あるいはパウロは、この三義を兼ねたつもりで、このような広い語を用いたのかもしれない。いずれにしても、死と共に死なない、ある霊的なものを指したことは明らかである。このある者によれば、ダビデの子イエスは復活をもって神の子として現れたとパウロは言うのである。すなわち、第四節の主旨は、その含む難解な語句のいかにかわらず、はなはだ明晰であると思う。

第四節の最後には「私たちの主イエス・キリストです」とある。これを原語の順序のままに訳せば

イエス キリスト 私たちの主

である。「イエス」は、ただ人としての名、すなわち彼の人たることを示す。「キリスト」はメシヤ、すなわち油注がれた者を意味する。ダビデの子、イスラエルの王として、イスラエル積年の希望であつた贖い主である。それゆえ、キリストという名称は、厳密に言えばユダヤ人に関わる語であつて、異邦人である私たちには関わりないものである。「私たちの主」とは、万民の主を意味する。万民の罪を負つて十字架に死し、よみがえつて神の子の栄位に即き、神の右に座して永遠に生き、今私たちのためにとりなし、今私たちに恵みと平安を与え、

生命と力とを賜わり、時が満ちれば再び来られる人類の救い主を言う。以上の三つの性質を兼ねるものが「私たちの主イエス・キリスト」である。人であると共にユダヤ人の王であり、ユダヤ人の王であると共に人類の主であるのが、すなわち主イエス・キリストである。「イエス」と「キリスト」とは、時間と空間との制限を受ける史的人物として彼を示し、「主」は時間空間を超越した永遠無限の存在者として彼を示す。「主」が最も広く、かつ重い語であることは言うまでもない。この語をもつて、彼と人類との関係が言い表わされるのである。それゆえ、福音を称して「キリスト教」と言うのは、実は不十分である。キリスト教はすなわちメシヤ教と言うに等しく、単にユダヤ人に関わる語である。「主」をギリシア語においてキリオスと言う。ゆえに、これをキリオス教と改称するとき、初めてその全人類に関わる救いの音信おとづれであることが示されるのである。それはともかく、「主イエス・キリスト」という一語は、不用意に発せられるべき語ではない。彼の本性を三つの側面から言い表わした語として、その内容の広さ、高さ、深さに注意しなければならない。然るに、今やこの語を無意味に口にする者が甚だ多いのは嘆くべきことである。